

人間科学研究科

- I 教育水準 教育 4-2
- II 質の向上度 教育 4-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、大阪外国語大学との統合から、グローバル人間学専攻を新たに設置した。教員一名当たりの大学院生数が約 2.2 名であり、ゆとりのある指導体制を確保している。社会人学生や留学生の人数がそれぞれ 25 名、12 名前後である。また、教員も女性教員比率が高まりつつあり、英国・米国・ドイツの外国人教員各 1 名を配置しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、全授業を対象に「授業評価アンケート」を実施しており、「大学院教育改革の取り組み事例」と題して、独自にファカルティ・ディベロップメント（FD）研修会を実施している。また、大学院 GP（文部科学省大学院教育改革支援プログラム）推進本部を中心としてカリキュラムを見直し、フィールドワーク、計量的分析力、英語の発表力を養う科目を新設しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、人間科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、人間科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「教育課程の編成」については、大学院博士前期課程修了後において就職する学生と大学院博士後期課程に進学する予定の学生のそれぞれ履修モデルを作成し、学生のニーズに対応した教育課程を編成しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、国際化に対応し英語での授業を6科目実施し、学生が国際学会で発表することを経済的に支援したことから、大学院生の海外派遣が9名となっている。また、「インターンシップ」科目を新設し充実化を図っている。さらに、科目等履修生や聴講生の受入れも積極的に行っているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、人間科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、人間科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、デスクワークとフィールドワークのバランスをとった授業の履修の仕方を図っている。また、英文論文執筆力を向上させるためのセミナーや授業科目を開設しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、学部と共通と推測されるが研究科に図書室を設置したり、パソコンを約60台増設し計量分析のソフトを充実させ、学生のフィールドワークを設備・機器の面から支援しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、人間科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、人間科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、標準年限内で修了した学生比率が博士前期課程で 65.1%、博士後期課程で 17.6%である。また、学生の学会賞受賞が増加し、海外の学会賞も受賞している。教員免許を取得する学生が多いなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、「授業評価アンケート」において、この点数のみから、学業の成果に関して学生の評価が高いとまでは断定できないが、授業に対する総合満足度が 4.5 点（5 点満点）と高い点数を得ており、相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、人間科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、人間科学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業(修了)後の進路の状況」については、博士前期課程の平成18年度の就職率は61.2%であり、就職先は、学部卒業者と比べ、より専門性を要求される職業に就いている。博士後期課程の就職率は83.9%であり、大学教員をはじめ研究者への就職が多くあるなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、卒業生及びインターンシップ受講生に対する人事担当者から好意的な評価が得られているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、人間科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、人間科学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果(判定)を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質(水準)を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が2件、「高い質(水準)を維持している」と判断された事例が1件であった。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果(判定)を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間終了時における判定として確定する。